

TAKE FREE

介護を応援する情報誌 [カイゴタイムズ・トーキョー]

介護 TOKYO Times

12

Dec.2020

介護のこと新発見。
地域密着、
この街と共に。



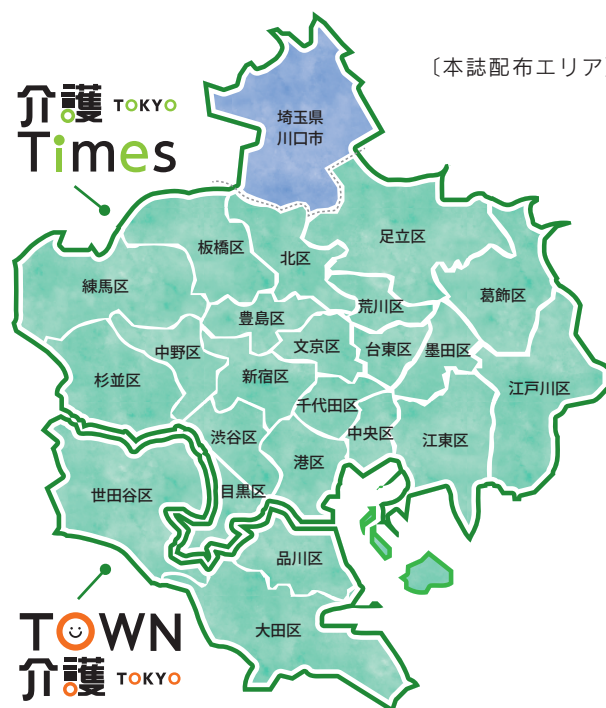
CONTENTS

- 02 **挑戦** 『株式会社シルバーウッド』 黒田 麻衣子 さん
VRの技術で「認知症」の方との関係づくりを目指す
- 04 **出逢い** 『認知症未来共創ハブ』スタッフ 青木 佑 さん
～あなたに“あい”たい～ 半田あいの出逢い輪
- 06 **育成** 株式会社介護コネクション代表取締役／ミライ道場代表 奥平 幹也 さん
**100人の介護専門家を育てるより、
1000人の介護経験者を作り出す!**
- 08 **自分** 看護師 桶田 玲子 さん
**「看護師」ではない「自分」という一人の人間として、
介護スタッフや利用者さんとの関係を築きたい**
- 10 **介護×不動産 座談会 vol.1**
『株式会社ハウスメイトマネジメント』ソリューション事業部 課長 伊部 尚子 さん
『有限会社 羽吹デザイン事務所』介護事業部 アモールファティ 代表 羽吹さゆり さん
**— 豊島区から考える —
どうする？ 超高齢化社会における「命の管理」**
- 12 **上映会**
**映画『ぬくもりの内側』
プレミア介護感謝上映会スタート!!**
- 14 社会福祉法人 江東園 地域事業部門 事業部長
TQM本部 サービス管理室 室長 井上 知和 さん
**「相手の立場に立つ」ことから得られる
現在のやりがい**
- 15 社会福祉法人 江東園
**AYUMIEYEを活用した
歩行測定会で見た地域課題**
- 16 早稲田エルダリーヘルス事業団 筒井社長
早稲田エルダリーヘルス事業団 服部さん
**最新の歩行解析デバイス「AYUMIEYE」
次号予告・メンバー紹介**



「地域」と「人」にフォーカスした
介護の「今」を伝えるタウン情報誌

〔本誌配布エリア〕



挑戦

VRの技術で「認知症」の方との 関係づくりを目指す

『株式会社シルバークロウド』 黒田麻衣子さん



本誌「12月号」
表紙モデル

黒田さん

認知症を「学ぶ」ことはできても、

「気持ち」まではなかなか分からない――

VRで認知症を疑似体験できる
「VR認知症」。

自身が体験をした時に衝撃を受け、

この事業に関わりたいと転職を決めた

黒田麻衣子さん。

多くの方に体験いただきたい、と奮闘する

彼女を紹介したい。

介護との関わり

「考える前に動いちゃうタイプですかね」

と明らかに話す黒田麻衣子さん。

そんな彼女は「チャレンジ」に溢れた
経歴を持つ。

現在は高齢者住宅の運営や「VR認知

症」を提供する、株式会社シルバークロウド
に在籍する彼女だが、前職は、WEBサ

イトで介護情報を発信する会社にいた。
「実は両親がデイサービスを運営してい

るんです。ただ、私が大学の頃に開設し
たのでそこまで深く関わることは出来

なかったんですが、転職する際に介護に



関連する会社を選んでいるところは、多
少なりとも両親の考え方や想いが影響
しているのかな。」と振り返る。

目の当たりにした「認知症」の問題

介護情報を発信する上で、介護家族が
どんな情報を求めているか直接聞きたい
と「介護相談ダイヤル」を2週間限定で開
設したことがあったという。介護に関する
相談を無料で受けるダイヤルだが、電話
対応する中でも「認知症」に関する相談は
強く印象に残ったと言う。「認知症がある

方と同居されるご家族からのお電話が圧倒的に多かったです。1件の電話が長時間に渡ることも多々あり、苦しい想いや悩みなど、生のお声を聞きました」。

VR認知症を体験しての発見

少しでも役に立てたらと、ドクターや専門家から認知症に関する知識を集めていた麻衣子さん。



日々模索する中で出会ったのが、現在携わることになった「VR認知症」だった。

「認知症を一人称で体験する中で、ちょっとした誰かからの声のかけられ方や関わられ方で混乱したり傷ついたり…。自分と一緒にじゃないかと思ったんです。認知症がある方が急に怒ったり大声を出したりすることが、問題行動」と受け取られることが多いですが、自分がその立場だったらきつとその方と同じように振舞うかもしれない。その理由は何か、どうすればいいのかを考えてコミュニケーションを変えればいいんだ、と気づかされました」と振り返る。その体験から、わずか2か月後にシルバーウッドに転職することになった。

VRを通して認知症の症状を体験する「VR認知症」の研修だが、参加者からは「今まで散々認知症に関する研修は受けてきたが一番学びが深かった」「明日から自分の介護の仕方が変わると思う」との声が聞けたそうだ。「認知症がある方の問題行動」とされるものにはすべて意味があるということと当事者の体験を通じて感じていただけたら、嬉しいですよ」と意気込みを見せる麻衣子さん。

「ワクワク」を目指して前進したい

そんな彼女の上司は、よく「それ、ワクワクするの?」と聞いてくるそうだ。「ワクワクって抽象的ですが、実は的を得てると思って。自分の提案をここがこうだから、ワクワクするんですけど説明できるよう想いを込めたり工夫をすることを意識するようになりました」。

活き活きと自身の仕事を語る麻衣子さんだが、今年の春は新型コロナウイルスの影響で持ち場を離れざるを得ず、同法人が運営する銀木屋に勤務したとのこと。いつ自分の仕事に戻れるのだろうかと不安を抱えたが、新しい発見の連続だったと言う。「VRで伝えているメッセージを現場で応用したときに、ほんとに、事前にそれを頭に入れるか

入れないかで全く入居者の方とのコミュニケーションが変わると実感できました。実際に認知症がある方と長い時間を共にし新たな気づきもたくさん得ました。」

「今振り返れば、全く無駄がない経験でした。これから予測不可能なことがあったとしても、同じように大切な経験になると思うので、どうやって楽しもうか、どうやってワクワクするのか。前向きに考えながら前進したいです!」



黒田さん(左)と近藤カメラマン

出逢い



青木さん(左)と半田インタビューアー

出逢い 第4輪

今回ご紹介いただいたのは、
青木 佑（あおき・ゆう）さんです。

【認知症未来共創ハブ】は、認知症のある方の思い・体験・知恵を中心に、実証・実装や学術評価、政策提言という事業を通し、“認知症とともに、よりよく生きる未来”を創る活動体です。

その中で、認知症のある方の声を蓄積し発信する「認知症当事者ナレッジライブラリー」というデータベース（Webサービス）の進行管理などバックオフィスとして携わっている青木さんにお話を伺いました。



「あなたに“あい”たい」

半田あいの出逢い輪

Vol.4

ご活躍されている方からのご紹介でひろげる、出逢いの輪

『認知症未来共創ハブ』スタッフ 青木佑さん

つながり

社協での経験が原動力に

国際基督教大学（ICU）卒。卒業論文でターミナルケアについて取り上げた中で、社会福祉士の役割に興味を持ち、専門学校へ資格取得後、埼玉県社会福祉協議会に就職し、知的障害者施設団体の事務局を担当する。「施設の方と一緒に研修や調査を行う中で、現場からは楽しさや悩みも葛藤も様々な声を聞かせてもらいましたが、一様に「もっと良くしたい」という熱さが伝わってきて、心を動かされました」更に、事務局のスタッフではなく、一人の仲間として受け入れてもらえた事が嬉しかったと青木さん。「忙しかったですが、とても充実していました。これから福祉に携わっていくと決意させてくれた時間でした」



埼玉県社会福祉協議会のシャキたまくと

当事者の声を世の中に伝える必要がある

【認知症未来共創ハブ】には昨年4月から参加。認知症のある方ご本人との活動はほぼ初めて。「症状や困り事はお一人お一人違う、そして認知症になってもさまざまな試行錯誤を繰り返して自分らしく暮らしを続けていく方がいらっしやるという事を知る所からでした。居心地の良い場所づくり、思いを話していただくにはどうしたらいいのか」話しかけ方や関係性をつくることの難しさも痛感し、反省を重ねながら構築してきました。「認知症のマイナスなイメージが広がり、診断を受けると色々調べた末に絶望してしまうという話をよく聞きます。認知症当事者ナレッジライブラリーには前向きな先輩達の言葉があります。そこにすぐに辿り着いていただけたら、景色が変わつたら」



知る事で怖さがなくなって欲しい

いつか家族が、自分だってなるかもしれない。「認知症発症後もお仕事をされている方もいますし、自身の体験を広く発信している方もいる。そういう声をもっと届ける事によって、認知症に対する偏ったイメージがなくなっていく。その為に知ってもらえる事が大事。少しずつでも、多くの人がご本人の声に触れることのできる機会をつくっていききたいです」

絶賛モヤモヤ中！

悩みあぐねてばかりという青木さん。「最近もモヤモヤし続けていますが(笑)それは可能性だという人もいて、確かに！と。自分の人生から求められているものを掴みたいからそのモヤモヤ。その気持ちを大切にしながら進んで行きたいと思っています」



「認知症フレンドリーな住宅」を考えるワークショップ

●インタビューア-半田あい



・フリーアナウンサー
・介護福祉士
自らが培ってきた目線から「介護を伝える！」

☆超高齢社会を創造的に生きる次世代リーダーのコミュニティ【KAIGO LEADERS (カイゴリーダーズ)】の運営メンバーでもある青木さん。介護・福祉領域に何かを投じてくれる様な多彩なゲストや多様な企画のイベント開催も行われていますが、実は、「介護」現場の人の参加が少ないという話。驚きでした。そこにはどんな理由が。そういった現場が見えていない部分の発信も願わずにはられません！因みに、私もモヤモヤ人間です。是非又、モヤモヤの共有させてください♪



2025年、介護のリーダーは日本のリーダーになる。

KAIGO LEADERS

育成

1000人の介護専門家を育てるより、
10000人の介護経験者を作り出す！

介護現場で働きながら、自分の力で進学する新しい奨学金制度

株式会社介護コネクシオン代表取締役／ミライ道場代表

奥平 幹也 さん



奥平さん

「ミライ道場」は、経済的な理由で進学が困難な学生たちが、介護施設で働きながら、「自分の力で進学する」自立支援プログラムだ。自身も新聞奨学生だった奥平幹也代表が、学校や受け入れ先を開拓して、ゼロから築いてきた「ミライ道場」の多くのメリットをもっと多くの学生、介護事業所に知ってほしい。

施設で働きながら学費返済

介護経験をキャリアアップに生かす

2014年度に1名からスタートしたミライ道場は、これまでに46名を受け入れてきた。奥平さんの出身地である沖縄県と首都圏の出身者が大半で、特養、



1期生の佐々木さん

有料老人ホーム、サ高住などの施設で働きながら（保育モデルも有り）、専門学校や大学、大学院に進学した。私財を投じてゼロからこのプログラムを立ち上げた奥平さんが、高校を1校1校自分の足で説明して回り、受け入れ事業所を開拓し、一人一人の学生の相談に乗って、橋渡しをした結果だ。

「学業に支障がないように、なるべく少ない時間で高収入を得たい学生」と「人手不足に苦労している介護事業所」とのマッチング。それは、奥平さんが「自分も新聞奨学生だったこと」と「不動産コンサルティング会社に就職してから、介護施設に投資をする投資家と多くの施設を見る機会を得たこと」から生まれた、奥平さんだからこそ閃いた発想だった。



1期生の佐々木さん(左)

「いろいろな施設を見学しているうちに、立派な建物ではないけどスタッフも入居者も生き生きしている施設もあれば、その逆もありました」と、介護現場に目を向けるようになった。高齢化社会を迎え、今後はいろいろな業界が介護の周辺に参入してくるのもわかっていった。

「学生たちが介護を経験することは、プラスの価値をもって卒業することになります。『ミライ道場』は貧困学生のための進学支援ではありません。超高齢社会で活躍するためには、介護の経験は必ず役立ちます」。

介護業界の目先の人材確保よりも、むしろ多様な業界に「介護の視点」をもつ人材が散らばっていくことを奥平さんは見据えている。

「週2回の程度の夜勤」で、あとは学業 専念 学校面・生活面・仕事面をサポート

大学卒業が生涯の安定を約束するものではなく、超高齢社会の中、家庭環境も大きく変化してきた。親は親の介護をし、自分の老後の資金の不安を抱え、子供の学費の負担も困難に。進学希望の高校生はますます不利に。

そのため、多くの学生が日本学生支援機構の奨学金を頼り、2・5人に1人が奨学金を利用している。だが、月に10万円借りれば、4年間で480万円＋利息の借金を背負つての社会人スタートになる。

一方、ミライ道場で介護事業所から借入した学費は、毎月の給与から天引され、在学中の返済を目指す。無理のないように、奥平さんが個別に返済シミュレーションも作成をしている。もう一つのメリットは貸付時期。

合格後、入学前に100万円近くの支払があるが、一般的な奨学金制度ではこの支払に対応できない。それが理由で入学を断念しないように、ミライ道場では納付期限に貸付が間に合うように、試験前から法人面接などを踏まえて、段取りをしている。

働き方と給料のイメージだが、仮にフル夜勤（土日を利用した研修後）を週2回、月8回シフトするとして、1夜勤2万円とす

ると月16万円になる。自宅通学生なら、生活費分を考慮しても、相当な額を学費返済に充てることができる。居酒屋等で週に何日も夜遅くまでバイトをするよりも、学業やサークルなどにも時間が取れる。「しかも職場は、安全性、室温等も含め快適な環境ですからね（笑）」。

「ぼくは新聞奨学生だったので、朝3時に起きて朝刊を配り、夕方3時から夕刊を配り、その後、集金もして、他に内緒でラーメン屋で出前のバイトもしていたので、睡眠時間は1日3時間くらいでした。でも、そのうち昼間もバイトに行つて学校をさぼるようになり、結局2年留年。自力進学の奨学金制度もあるが、学校をさぼっても誰も止めない。その反省も踏まえて、ミライ道場では、生活が乱れたり、学校へ行かなくなることをな



いように、在学中は学校面、生活面、仕事面にわたつてサポートしていきます。奥平さんだけでなく、介護の専門家や道場卒業生がサポーターとして学生たちを支えている。「進学支援」と「人材育成」の協力はいつか介護の世界に還元される

受け入れる介護事業者側にも懸念はある。「でも卒業後は辞めちゃうんですよ。」と言われることも。でも、奥平さんはこう聞き返す。「逆に、御社の職員さん達は辞めずに何年ぐらい定着されますか？」

ミライ道場の学生さん達は、覚悟を持って入つて来ます。現場がしっかりと育て、介護の面白さを伝えることが出来れば介護業界に進路変更する学生さんも出てくると思いませんかと。

また、学生たちが介護経験に誇りを持つためにも、「私も含めて介護業界で働く介護職は、介護の高いスキルに対して、それだけの対価（自費）を堂々と請求する勇氣を持たなければならぬ」という。

奥平さんの言いたいこと、やりたいことはまだまだ山ほどあるが、まずはこの自立支援プログラムを事業化のために奔走する毎日だ。こままでの人生を「気合いで乗り切ってきました」という奥平さんの目下の悩み

は、その「気合い」だけでは通用しないことがあったり、「ほかの人に仕事を頼むのが苦手なこと」。今後ますます大きなプロジェクトになるためには、奥平さんの頑張りだけでは手が足りない。多くの人々の理解と協力が必要になってくる。

「進学支援」と「人材育成」を両輪としているミライ道場。これまでに多くの学生たちが介護の経験を自分のやりたいことに繋げている。今回は紹介できなかったが、ミライ道場の奨学金制度を利用している学生の頑張りや卒業生の活躍を、今後も紹介していく予定だ。



奨学生たち



ライター 谷口のりこ

自分

「看護師」ではない
「自分」という一人の人間として、
介護スタッフや利用者さんとの
関係を築きたい

看護師 桶田玲子さん



桶田さん(右)と入居者さん

「履歴書に職歴が入りきらなくて、恥ずかしくなることもありますよ」とサバサバと笑う桶田玲子さん。

「すべて成り行き！」と言いが、転職にはいつも「もっと知りたい」という思いがある。大学病院、訪問看護、訪看の管理者、個人病院、特定施設などを経験し、何でもこなせる「スーパー看護師」の印象だ。

3年間の大学病院付属の看護学校時代は、1年目から「もうやめてやるー」と思うほど勉強がきつかったという桶田さん。

そのたびに、離婚後苦勞して育ててくれた母親の「看護師は給料いいよー」という言葉を思い出した。

幸いなことに、実習先の精神科では学生の学びを尊重してくれ、臨床の面白さ



看護学生時代 お母さんと

を知った桶田さんは、「就職するならここだ！」と決心。

だが、3年間の「御礼奉公」が終わると、病院を去った。「病院以外の世界を知らないと、視野が狭いままになってしまおうと思ったから」。

その後、介護の会社で本社勤務になり、10割負担の自費利用者のヘルパー派遣業務、訪問入浴に携わる。

そこでは身なりや言葉遣いに対して厳しく、「介護、医療はサービスだ」と気付かされた。トラブル解決のため出張をしたり、ヘルパー講座の講師をすることもあった。介護現場でいろいろな仕事をこなしながらも、桶田さんは、ここで再び



若手看護師時代(右)

立ち止まった。

「精神科の経験しかないままでは、看護師として介護現場で太刀打ちできない」。

今度は、複数の科がある中規模個人病院へ。そこで経験を積んだ後、訪問看護に移り、いまは特定施設に。

いざ施設で働いてみると、施設の看護師は想像以上に大変だった。「仕事量ではなく、施設内のルールや人間関係。在宅介護の自由度をあらためて感じましたね」。

多くの職場を経験して思うのは、「どんな職場でも、絶対に得るものがある」とい



看護学生時代(左から2番目)

うこと。振り返って、『あの職場で自分は

こういうことを学んだな』と気付ければ、意味はある。それと、桶田さんが大切にしてきたのは、「自分が間違っていると思うことは絶対にやらない」という信念だった。

訪問時代に、介護と医療の“溝”を感じるがあった。医療従事者の高慢さが垣間見えることもあり、「自分が管理者になったら、まずは自分のグループ内の介護事業所と仲良くなる。それがで



訪問看護師 カシワレシス

きたら外部の事業所に輪を広げよう」と思っていた。

実際、立場を越えて、誰でも気さくに受け入れる人柄に、桶田さんのファンは多い。「介護士も看護師も医者も、ほかの職種の人も、すべて脱いでしまえばただの人なんです」。ドキッとする表現だが、つまりは立場を越えたフラットな関係。「看護師として上をめざす気はありません。ずっといい看護師であることが私のプライドかな」。

— 介護経営サポートシステム —

SuisuiRemon

実際に現場で働くスタッフの意見を取り入れながら、常に「使いやすい」を追求して改良し続けています。 **Suisuiちゃん**

各種介護保険サービス、障害者総合支援、自費サービスに対応!

全国5,500事業所様で利用中! | 全国でのユーザ様も急増 | 介護のセントケアグループ運営の抜群の安心感

SuisuiRemon導入6つのメリット

売上・入力・債権の明細を一元管理	返戻でお困りの方は効率的な入金管理で回収率アップ	複数事務所の一括管理
簡単便利なスケジュール作成&多彩な入居一時金、前受金管理	介護企業としてのノウハウを活かした介護関連帳票	簡単・便利な保険外サービスの登録・管理

経営・運用資金改善、業務効率化、経費削減にも貢献します!
 ● 早期資金化 ● 他社記録連携 ● 業務効率化の口座振替えサービス

安心のサポート | 電話 | FAX・E-mail | リモートサポート

バージョンアップも自動更新

アセスメント特化型システム

1. 看護のアイちゃん
訪問看護アセスメント・業務支援システム

- メリット1 アセスメントの標準化を支援! 放送大学大学院 山内豊明教授監修! 新アセスメント手法! 完全搭載
- メリット2 看護の質を保証!
- メリット3 帳票連動により業務負担を軽減!
- メリット4 お客様によるバージョンアップは不要!

全国約540ヶ所の在宅介護を運営するセントケア・グループの運営書式集ツール
コンフォーム・パッケージ

法定書式集 運用マニュアル 研修内容

1. リスクヘッジ
コンプライアンスの整備から制度改正に迅速に対応することができます。
2. 管理コストの抑制・削減
制度対応や研修プログラムの作成等、見えにくい管理コスト(人員)の抑制を可能にします。
3. 本部機能の強化
本部主導での統一書式の整備や現場からの質問等に対して迅速な対応を可能にします。
4. サービスの質の担保
新規スタッフのOJTツールおよび毎月の研修ツールにて研修体制を構築できます。

saint-works 介護のセントケアグループ セントワークス株式会社
 《TEL.03-5542-8097》



ライター 谷口のりこ

さらに、「最終的には看護師でない自分でいたいんです」と。その真意は? 「看護師と利用者という関係を取っ払わないと本当の関係性なんて築けないじゃないですか」。立場や職種や、そういう垣根をすべて取っ払った先にある関係を求めて、桶田さんはこれからも介護と看護の世界を行き来するのかもしれない。

—豊島区から考える— どうする？ 超高齢化社会における 「命の管理」

『株式会社ハウスメイトマネジメント』
ソリューション事業部課長

伊部 尚子さん

『有限会社羽吹デザイン事務所』
介護事業部アモールファティ代表

羽吹さゆりさん



(左から)藤井編集長、伊部さん、羽吹さん、satomiさん

超高齢化社会において深刻化する孤独死。

さらには、近年、住民の認知症等を起因とした近隣トラブルや、賃貸への高齢者入居拒否も問題視されている。

加えて、はなやぐ繁華街・池袋が所在する東京都豊島区は、平成30年の調査で空き家率が23区内1位に。もちろん、他地域同様、前述した課題も待たなしではびこる。

現状を打破するには、一体どのような対策を講じるべきか。そのヒントを探るべく、複数の重大な課題がクロスする豊島区から、介護・不動産、2つの業界による視点を交えた座談会を開催し意見を交わした。

第一回目である今回のメンバーは、独立系の賃貸不動産管理会社、株式会社ハウスメイトマネジメントで長年現場の仕事を経験してきた伊部尚子さんと、様々な企業等で家族介護の相談を受けているアモールファティの羽吹さゆりさん。

両者とも、その社、そして住まいを豊島区に構える。また、本誌編集長および、筆者も同席。手始めとして、今回の座談会は現状の問題の整理からスタートした。



相次ぐ孤独死。「最期の場所」のその後は

羽吹 介護の現場で働いていた頃、一人暮らしの方って本当に心配だったんですよ。たとえば、支援がない日に室内で転んでしまって助けを呼べないまま倒れていたり、そうすると孤独死だって起こり得ます。万が一そんなことが起きてしまつたら、ご遺体が見つかった後はどうなるんだろうとか。

伊部 その後のこと、実はわたしたち不動産会社がやってるんです……。

羽吹 ですよ。結局はそちらに投げってしまうので、介護現場で働くものには「その後」のことについて詳しく見えていなかったりするんですよ。だけど実際に「その後」が大変ですよ。

伊部 はい。基本的には警察が入って、ご遺体が搬出されて、相続人等を探していただいて。わたしたちはお部屋を空っぽにして原状回復工事をしたり、賃貸借契約の解約手続きや敷金精算などを担っています。

羽吹 そうなんです。特殊清掃の方のお話を

聞くと、かなり大変なのがわかります。

伊部 賃貸住宅を借りるとき、「借家人賠償」として「大家さんに対して借りたものを元の状態に戻して返す義務が生じますよ。自殺と違って病死や事故死は故意や過失ではないのですが、ご遺体が発見されないまま腐乱して時間が経ってしまった場合も同様に、借りた方に責任が生じます。部屋が傷んでしまつたり、臭いがついたりしてしまうので、例えば表面の壁紙や床材だけでなく石膏ボードや床下地などもすべて変えないといけない。そうすると、必要な費用は50万程度では済まないんですが、ご遺族に事情があつて払えない場合などは、大家さんが泣き寝入りして払っていることもあります。リフォームしないと、次、貸せない。そういった所以で、「もう二度と高齢者に貸さない」と思われてしまうことも多々あるんです。

藤井 こういったケースに対応する保険のようなものはないんでしょうか？

伊部 一応「孤独死保険」と呼ばれるものがいま各保険会社から出ていて、孤独死があつたときの、遺品整理や、特殊清掃、原状回復、更にはリフォームが終わるまでの家賃を保証したり、さらに、次に募集をする際に心理的瑕疵(※1)を告知した際の家賃の減額分を補填したりするものもあります。

藤井 なるほど。

伊部 とはいえ、とにかく早期発見をしないからそういったケースが生じてしまうので、「すぐ発見しよう」という方向に現在働きかけています。現状では、「ご遺体が発見するのに死後1週間〜1ヶ月くらいかかつてしまふ損害が大きいので、それを保険金でカバーする」といった後ろ向きな方向に力が入つてしまつているので、ないよりははずっといいんですけど、ちょっと違う気がします。

「命の管理」を不動産会社がせざるを得ない時代に

伊部 これまで不動産会社は人の「命の管理」についてのはしてこなかったのですが、このように、現在ではせざるを得ない状況に立たされています。

さらに、孤独死だけでなく、認知症になった住民の方が近隣でトラブルを起こしてしまい警察を呼ばれてしまうなど、色々な問題が生じていて。クレームをいただくも身内の方に連絡をするんですけど、対応していただけないこともあって。そういった場合は現場の担当者が対応しているんです。

羽吹 命の管理。ほんとうにそうですよね。

伊部 なので、一般の賃貸管理、建物管理、維持管理とは別に、「人間への対応にも注力できるように、昨今弊社では「高齢者サービス検討会」をつくって「どのように高齢の方を受け入れていくのか」を試行錯誤しています。できることはたくさんあると思うんです。

介護×不動産、まずは連携することから

羽吹 お話をうかがって、地域包括のようなシステムが不動産屋さんの中にあるといいのかな、と思いました。

藤井 そうですね。もしくは、たとえば、各地域でケアマネージャーが不動産会社さんと提携して、介護保険で対応できない住民の方々の安否確認や相談を自費で行うというの、ビジネスとしてどうなんでしょうか。相談料1ヶ月1万円とか、一件につきいくらか決めて。見守りが必要であれば継続で契約していただく。

伊部 あ、すごくいいかもしれません。大きな不動産会社からはもちろん、地域の不動産屋さんからも望まれていることだと思います。

羽吹 「産業カウンスラー」ならぬ「産業ケアマネージャー」ですね。わたしは絶対やった方がいいと思う。それがすぐには難しければ、まずはケアマネが今の伊部さんの意見や不動産の現状を把握することも大切だと思います。なので、たとえば伊部さんに、ケアマネの協議会等に講師として来ていただいて、不動産会社さんから共有しておきたいことや、助けてほしいことを伝えていただくとか。そういったことから新たな発見や進展もあると思うんです。

住まいってというのは、誰にとってもなにより重要な環境因子。超高齢化時代には、不動産の専門家と介護の専門家が連携するというのはほんとうに必要なことじゃないですか。

高齢者問題と空き家問題がクロスする街・豊島区

羽吹 他にも、お引越しをしたいご高齢者が入れる物件がなかなか見つからないケースも多いですよ。高齢者入居拒否だとか、そういう課題も、

不動産会社さんと介護の専門家がうまく連携できれば緩和されていくのではないのでしょうか。

——ちなみに、現状では、引越し先がなかなかみつからないご高齢者は、どのような物件に落ち着かれるのでしょうか？

伊部 たとえば豊島区だと家賃がそれなりにしますから、古い物件が取り壊されると同じくらいの家賃で部屋を探すのとても難しく、区内の物件がご希望でもなかなか見つからない方は時間をかけて諦めて、他の区や郊外に引っ越されています。

——ご高齢者の住宅確保が困難と言われる一方で、「空き家」が増え続けているというのは矛盾のように感じられます。特に、豊島区は東京都23区でも空き家率1位とされていますが、そもそも「空き家」というものはどのようにして生じるのでしょうか？

伊部 まずは前提として……わたしたち不動産会社にとっての「空き家」と、区の調査が指す「空き家」はイコールではありません。不動産会社にとっての「空き家」とは、リフォームが済み、家主も貸したいという気持ちがあつて、流通に乗せられる、あくまでも商品です。対して、区が示す「空き家」には「ただ放置されている建物」が含まれています。区で問題視されている「空き家」というのは、そういった、貸す準備もできてないし、貸すか売るかすら決まっていな、不動産の流通に乗ってこないもの。なので、空き家率の高さに関わらず、豊島区で預かっている物件にはそんなに空き家がなかつたりするんです。

豊島区は普通に家賃も高く貸せる場所なので。

——なるほど……。

伊部 どうして空き家が放置されているのかということに関しては、建物が老朽化してしまっている

にもかかわらず、リフォームするお金がなかったり、家主が亡くなって親族間で揉めていたり、売るのが貸すのか踏ん切りがつかなくなったりなど、さまざまな理由が想定されます。

羽吹 「再建築不可」の入り組んだ地区で、壊したもう建て直すことができないからって放置されている建物もありますね。

伊部 住まいをお探して、建物の改修が必要ない「介護が始まる前」のご高齢者は区内に大勢いらっしゃるの、そういう方々と区の「空き家」をマッチングするという動きも豊島区にはあるのですが、どうしても国交省のセーフティネット住宅(※2)に登録するとすると、耐震基準を満たしていないといけないなど、新たな課題が出てきてしまうんですよ。だから、他の方法も考えていかないとけない。

羽吹 なかなか難しいんですね。豊島区ってターミナル駅でどこにでも出やすいですし、郵便局やスーパーにもアクセスが良いので、本来は高齢者でも住みやすい街だと思うんですけど、様々な課題を抱えているからこそ、上手く対策が講じられれば、あらゆる地域にとっても良いモデルケースになるはずですよ。

※1 不動産物件を取引する際、借主・買主に心理的な抵抗が生じる可能性があることから指す。例としては、自殺、他殺などがあつたこと、近隣に嫌悪・迷惑施設が立地していることなどが挙げられる。自然死は心理的負担ではないとされる意見もあるが、法律等で決まっているわけではないので、トラブルを恐れる不動産業者は告知を行う傾向にある。

※2 高齢者や子育て世帯、障害のある方、所得の低い方など住まい探しに困る人の入居を受け入れる住宅。専用住宅として所有する建物登録すると、住宅改修費補助が出るが、建築基準法や新耐震基準など、行政所定の基準を満たしている必要がある。



ライター satomi

編集長 藤井 寿和



上映会

映画『ぬくもりの内側』プレミア介護感謝上映会スタート!!



(左から)あすプラスケア関口慶輔さん、野村敬一総合プロデューサー、田中孝征監督、TOWN介護Gunma外丸泰史、司会フリーアナウンサー半田あいと吾妻中央高校の皆さん

『ぬくもりの内側』は、身寄りのない人々を受け入れるホスピスを舞台に、生きていく事の素晴らしさや絆が描かれたヒューマンドラマ映画です。



映画『ぬくもりの内側』より

来年7月の一般劇場公開(2020年11月20日現在)を前に、新型コロナウイルスの渦中で奮闘されている方々に向けての感謝上映会が始まりました。
田中孝征監督、野村敬一総合プロデューサーが登場したのは群馬県内で福祉を学ぶ高校。県立伊勢崎興陽高等学校と県立吾妻中央高等学校の生徒の皆さんへ『ぬくもり』が届けられました!

原作は2013年、2014年に脚本に着手。田中監督が温めてこられた、その『ぬくもりの内側』の意味とは

「皆にそれぞれ先祖がいますよね。亡くなくても、天国から私達を見守ってくれている。そして、私達ももし天国に行つたとしても、私達の子孫への愛はずっと続いています。同じ様に。言いたいのは、地球上に生まれ、生きていく限り、ぬくもりの内側にいるよということなのです」

人生には限りがあつても、魂と愛はそれぞれの人々の中で永遠に生きていく。その人生の繰り返しがあるからこそ、これからの未来が存在し、人生は生かされていく。いつも『ぬくもりの内側』で私たちは存在している。



伊勢崎興陽高校の皆さん
(左)司会あかぎ 園 千彩香さん (左4番目)アイ・ウィッシュ(株)小池 昭雅さん



吾妻中央高校にて

質疑応答では、田中監督の半生についても語られました

「私は2歳から両親がいません。子供の頃から、看取つてきています。必死に育ててくれた祖父母や親代わりになつてくれようとした人もいました。大切な仲間も。二十歳になるまでに何人も死んでいく。

こんな人生無いよなという気持ちでしたが、大切な人を多く失つた分、弓矢の様に人に対する思いが強いのかなと思います。お父さん、お母さん、おじいちゃん、



吾妻中央高校にて

おばあちゃん、先祖が残してくれた事を私が責任を持って頑張って生きる！という風を考える様になりました。先祖の愛を受け取って、後世に伝えていく。この映画で言っている事です。多くの愛と感動を世界に届けることが使命だと思っています。私の話をしたら朝までかちやいますよ(笑)」

映画の感想と共に、監督自身の話にも興味深く目を輝かせる、生徒の皆さんのやりとりが行われた。

野村総合プロデューサーからは、介護従事者のポジションという話が

「ノンフィクション作家の柳田邦男さんという方が『2.5人称』という言い方をされています。家族でもない、他人(第三者)

でもない、その中間に介護や福祉に従事される方のポジションがあるのかなど。人間関係が希薄になっていると言われますが、この映画では、家族でない人々による、まさに2.5人の位置関係が描かれています。真の家族と他人の中間点という価値。そんな新しい人間関係ができたらいいのかなと考えます」

最後に田中監督からのメッセージ

「この映画は、看取り、介護、看護、医療、人間愛、家族愛、様々な角度からつくりました。私は介護の世界に携わってはいませんが、介護を『伝える』事はできる。それが自分の趣旨。皆さんもたった一回の人生、この時代に生きている者として、共に頑張っていきましょう！」

この作品を通して、世界中の沢山の方が、未来をより明るく思い、もっと愛を大切にしてもらえたらという願いも語られた。

お堂で上映会！

11月某日、東京都北区にある宗教法人正光寺にて、介護従事者を含めた地域の皆さんを迎えて開催された。

参加者からは、「先月倒れた祖父と重なり、涙が止まらなかつた」「亡くなった父との楽しい出来事が蘇ってきた。忘れていた温かい気持ちがい出されて、すごく幸せな気分になった」等という感想が寄せられた。



上映会 正光寺にて

「またこういう時間をつくりたい。皆さんと心の共有をしたいです」と田中監督。

野村総合プロデューサーからも、「我々はどこへでも行きます！街角映画館でもいい。様々なテーマがありますから、何でも観て色々なことを感じていただけたらと思います」

介護従事者に限らず、地域のコミュニティの場等へも積極的に上映を行うとしている。

是非、田中監督が一言一句込めた魂と、『ぬくもりの内側』に触れてみてください！！



ライター 半田 あい



正光寺上映会にて、参加者の皆さんと

「相手の立場に立つ」ことから得られる 現在のやりがい



井上さん

社会福祉法人 江東園

地域事業部門 事業部長

TQM本部 サービス管理室 室長

井上知和さん

「高校球児としてチームプレーを意識してきた経験が現在のやりがいにも繋がっている」と話す井上知和さん。東京都江戸川区にある社会福祉法人江東園にて地域事業部門の事業部長、TQM本部 サービス管理室室長として多岐にわたる業務を担当している。入職後の様々な現場の経験が「地域課題」に取り組み礎となっている。介護業界に入るきっかけは、熱中していた高校の野球部時代に感じた「チーム全体で同じ方向にむかつて行くこと。という経験の積み重ねが自分にとって心地よく、相手の立場に立つて考え主体的に動くことが自分自身にあっていると感じた」から。

高校卒業後は社会福祉士養成課程へ進学。ソーシャルワーカーを志した。

養成課程卒業後は現在の社会福祉法人江東園へ入職。平成9年に新卒として入職して、現在23年目になる。入職の決め手は、ソーシャルワーカーを目指し、「まず介護現場での実践を積もう」と就職先を探しているときに、当時は珍しかった保育園と高齢者施設が一体となっているというところに魅力を感じたことだった。入職当時は、食事・入浴・排泄といった介護現場での業務からスタートし、その後、主任職、ケアマネージャーなどの業務を経験。

また、平成18年に開設した障がい者支援施設を併設する「江東園ケアセンターつばき」の立ち上げにも携わった。

立ち上げに携わった経験は、「『これまでは目の前の方にいかに良い環境を提供するか』という視点が主だったが、これを機に『外部環

境にも目を向ける』きっかけになったとのこと。このような介護以外の業務経験は、「目の前の人への支援を『地域』という枠組みで捉えると、一つの領域だけではなく様々な要素が重なっていることが多い」という地域課題への気付きにも繋がっているとのこと。

「地域にはもつと課題を抱えていてその一部を我々がみている。法人や施設の規模が大きくなれば頼りにしてもらえることが多くなるが、その状況に慣れることなく常に課題に取り組んでいきたい」と力強く語ってくれた。

最後に、「相手の立場に立つ」という意識から生まれた素敵な取り組みを教えてください。「常々現場のスタッフが相手の立場に立つて考え行動したときに得られるフィードバックを受けて、それを働き甲斐に変えていきたいと考え

ていたところ、今年度は顧客満足度調査に加えて、利用者さんのご家族から職員に向けて励ましの言葉をくださいという取り組みをしました。その結果、ご家族から直筆の感謝の言葉をとてもたくさんいただけました。

これに喜んでいる職員を見て、私は職員のために動いて、職員は利用者さんのために日々考え動いて、その利用者さんのご家族はそれを感じてくれて職員へメッセージをくれてという、全てが繋がったということがあったんです。」

このエピソードから、野球部時代に感じた「相手の立場に立つて考え主体的に動くことが自分自身に合っている」という経験の積み重ねが、現在繋がっているのだと感じた。



ライター 笠原 正寛



AYUMI EYEを活用した 歩行測定会で見えた地域課題



社会福祉法人江東園では2020年9月から「歩行測定会」を実施している。この測定会は、早稲田エルダリーヘルス事業団が開発した最先端の歩行能力解析デバイス「AYUMI EYE」を使用し、地域の高齢者向けに行っている。この取り組みを通して地域ニーズの把握に繋がっている。

測定会実施のきっかけについて、社会福祉法人江東園地域事業部長の井上知和さんは2025年問題に向けて、今のままでは地域の課題にさえ続いていけないのではないかと、新たな地域課題が出てくるのではないかと「思いから」と話す。

さらに、「法人の在宅部門から、コロナの影響で地域の高齢者からの相談件数が減り、このまま外に出る機会が減り、人と接することがなく

なっていくと認知症が進行してしまったり、筋力低下が進んでしまうのではないかと」という声が上がってきたことも要因の一つだ。

これらのことを踏まえ、行政や町会・自治会の皆さんと話し合いを重ねてきたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響から「何かをしたくても動けない」という現実もあり、「そうであればできることをやってみよう」ということから実施につながった。

一回目の実施は9月。場所は近隣の区民館で行った。

初回にもかかわらず参加者はなんと23名。告知は運営している地域包括支援センターや区民館でチラシを配布したのみ。2回目も23名の方が参加した。

参加した人の感想では、「自分で大丈夫だと思っていたが数値が思ったより低かった」と「結果を受けて何をしたら良いかわからない」という声が聞かれた。



中でも「何をしたら良いかわからない」という声に対して、同行した機能訓練指導員がAYUMI EYEのデータを基に運動のアドバイスをしたり、同じく同行した地域包括支援センターのスタッフが現在の生活状況を聞き取りするなどした。加えて、地域にある自主グループの情報提供なども実施した。

井上さんは「歩行測定会を通して地域のニーズが分かってきて、地域の資源をつなげるためのアイデアを検討できるようになった。」と話すが、「地域課題は我々だけの力では解決しきれない」とも。

「くつろぎの家」という地域の高齢者の集う場所があった。ここにはごみ焼却場の熱を利用した入浴施設もあり居場所となっていた施設だったが、清掃工場建て替えのため2020年9月に閉館してしまった。

このことを受けて、新たな居場所づくりという「地域課題」が生まれており、ラジオ体操などを企画し自主グループ化に取り組んでいる。

11月に予定されている第3回目の歩行測定会では、「新たな展開を考えながら、地域の人たちはこの測定会の周知をしていき、自主グループなどにつなげていきたいと考えています。」と井上さん。さらに「2025年問題に向けて、地域に住む方々が自分自身の健康に関心をもって、元気な地域にしていきたいですね」と地域に対するこれからの思いを伝えてくれた。



ライター 笠原 正寛

〈お詫びと訂正〉

2020年10月号 P8『対談』ページにて、誤りがございました

〈誤〉「株式会社 福祉医療酸器」 → 〈正〉「株式会社 星医療酸器」
係長 須田 健太さん 係長 須田 健太さん

読書の皆様、ならびに株式会社 星医療酸器の須田様、関係者の皆さまにご迷惑をお掛けしたことを、深くお詫び申し上げます。

年の瀬も迫り 今年も残りわずかとなりました

読者の皆様ならびに関係者の皆さまには 本年も格別のご厚情を賜り心より感謝申し上げます

一刻も早い新型コロナウイルス感染症の終息を願うとともに

皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます



来年2月号は2月15日発行予定です。

2月号 掲載情報募集中

介護 TOKYO
Times



介護施設等の

求人情報も掲載できます。

お気軽にお問い合わせください。

TOWN
介護 TOKYO

お問い合わせ

株式会社 是眞 〒115-0041 東京都北区岩淵町32-11

☎03-5939-6682

※本誌の内容や発行日は予告なく変更になる場合があります。

Members Introduction
メンバー紹介



発行人

高橋 寿光



発行人及び編集長

藤井 寿和



カメラマン

近藤 浩紀



インタビューアー

半田 あい



記者・営業

笠原 正寛



ライター

中澤 真弥



ライター

塩野 涼子



ライター

satomi



アドバイザー

小林 弘和



事業責任者

戸田 昂志



総務責任者

岩崎 巧磨

発行所

株式会社 是眞
〒115-0041 東京都北区岩淵町 32-11
TEL.03-5939-6682

企画・編集

株式会社 是眞 合同会社 福祉クリエーションジャパン

発行予定

2月、4月、6月、8月、10月、12月

介護施設・広告掲載のお問い合わせは
株式会社 是眞

☎03-5939-6682 まで

■本誌記事・写真等の無断転載、使用を禁じます。

驚きのコストダウン

献立表・調理レシピ付き

介護事業所向けの 食材販売



1日
3食

490円

(税別)

朝130円
昼180円
晩180円
お米・調味料別

★+60円でおやつをつける事も可能です ★朝・夕2食可

安心の食材を、
美味しい献立で

新鮮な食材を献立に合わせて人数分配送いたします

栄養士がバランスを考えた美味しい献立を作成します

旬の食材を取り入れた(季節を感じるメニュー)提供

※ご要望があれば、米・調味料も配達いたします

〈例〉30名様利用の場合

1日3食 650円の場合

年間 7,117,500円

1日3食 490円の場合

年間 5,365,500円

ズバリ
年間
\コストダウン/
-1,752,000円

東洋商事株式会社は

今まで飲食店様(全国約6,000軒以上)食材を供給している会社です。
この度、そのノウハウを基に介護事業所向けの食材を販売することになりました!
各仕入れ業者様のご協力で、この価格での提供が可能となりました。

対応エリア

練馬区、板橋区、北区、豊島区、小平市近隣

TOYOSHOGI 食品総合商社 東洋商事株式会社(首都圏営業所)

〒179-0076 東京都練馬区土支田1-35-32 <http://www2.tsnet-web.jp>

お問合せ先 TEL.03-5905-1511

介護食担当
梅田

個人さま・法人さま

取材先募集。

目指す介護を

発信しませんか？

掲載
無料



介護を応援する情報誌 [カイゴタイムズ・トーキョー]
本誌へ掲載する記事を大募集

取材・広告に関するお問い合わせはこちら

▶▶▶ 株式会社 是眞 〒115-0041 東京都北区岩淵町32-11 電話03-5939-6682

有料広告募集

伝えたい人に伝える広告

ターゲットに直接届く広告

印刷・掲載のコミコミ価格

広告サイズ多数対応(1/4~フルページ)

介護Times 広告主募集